

黄節『阮步兵詠懷詩注補篇』・補遺

沼口 勝

黄節（一八七三—一九三五）の「阮步兵詠懷詩注補篇」は、一九八四年三月、北京の人民文學出版社から重版された『阮步兵詠懷詩註』（一九五七年四月初版）に付されて公刊されたものである。この「補篇」が、久しく埋もれたまま一般に知られることのなかった、魏の阮籍（二一〇—二六三）の四言の「詠懷詩」十三首の本文を収め、かつ民國十九年（一九三〇）二月の日付をもつ、黄節の識語と注とを伴うものであることについては、すでに周知のことがらに屬するであらう。

ところで、黄節の注が、四言「詠懷詩」を解するうえで、参考とするに足りるものであることは言うまでもないのであるが、少しく欲を言えば、それは、まだ必ずしも十全の注であるとは言えないようである。黄節の仕事は、この連作の本質にある程度まで迫りつつ、遺憾ながら、それを貫く水準にまで達しないで終ったという感を、私自身いだくのである。それでは、その原因はどこにあるのであろう

か。私は、結局、黄節が阮籍の用いた手法を十分に見抜けなかったところにあると考える。

思うに、四言「詠懷詩」において阮籍の用いた手法は、凡そ三種に分けることができる。

即ち、第一は、『詩經』の語句を引用しつつ、その「興」の意を採り入れてこれを意圖的に錯綜させ、そこに自己の深意を託するものである。なお、この場合注意を要するのは、阮籍が『詩經』を「魯詩」に據り用いていることでは、したがって、私たちが、その『詩經』からの引用語句を解釋する際には、遺存している「魯詩」の説にできうる限り據ることが望ましいのである。

第二は、魏朝の中心人物であるいわゆる三曹（曹操・曹丕・曹植）の詩文の語句を借用し、これによってその詩が、魏朝に關連する内容を詠うものであることを暗示しようとする手法である。

第三は、主として堯舜禪代に關することを以て漢魏禪代

のことに喩え、また、堯舜禪代・漢魏禪代のことを借りて、眼前に進行する魏晉禪代のことを暗示しようとする手法である。なお、この場合、禪讓と讖緯思想とが不可分の關係にあることから、讖緯に示される事象が詩中に用いられていることに注意しなければならない。

なお、右に述べたことがらについて、私は、「阮籍と『詩經』—四言「詠懷詩」を例として—」（『中國文化』1985、大塚漢文學會、昭六〇・六）および「阮籍の四言「詠懷詩」について—その修辭的手法を中心として—」（『日本中國學會報』第三十八集、日本中國學會、登載豫定）と題する拙稿に詳論したので、参照していただければ幸いである。

〔阮籍が、前述のような特殊な手法を用いて、甘露三年（二五八）ごろから以降の魏朝末期の時世の變遷を暗示的に語りつつ、自己の懷いを訴えようとした連作、それが四言「詠懷詩」十三首であった、と私は考えている。〕

この拙い注釋は、以上のような四言「詠懷詩」についての鄙見にもとづいて、黃節の言及しなかった諸觀點を、注釋のかたちで補うものである。したがって、原則として黃節の注にすでに引用してある典據は、これを省略に付した。ただし、『詩經』を典據とするものの中、重要と思わ

れるものについては、これを記することとした。なお、注の後に、その作品の内容その他についての簡単な説明を付したが、これは文字通り鄙見にすぎないものである。諸先生方のご指教を賜りたい。

其 一

天地網羅	元精代序	清陽曜靈	和風容與	明日映天
甘露被宇	翫鬱高松	猗那長楚	草蟲哀鳴	鷓鴣振羽
感時興思	企首延佇	於赫帝朝	伊衡作輔	才非允文
器非經武	適彼沅湘	託分漁父	優哉游哉	爰居爰處

〔注〕○網羅 『藝文類聚』作「烟燼」。〔曹植・制命宗聖侯孔羨奉家祀碑〕：皇上懷仁聖之懿德、兼二儀之化育、廣大苞於無方、淵恩淪於不測、故受命以來、天人咸和、神氣烟燼、嘉瑞踵武、休徵屢臻。〔魏志・三少帝紀・高貴鄉公髦・甘露元年夏四月丙辰・裴注引・帝集載帝自敍始生禎祥曰〕：惟正始三年九月辛未朔、二十五日乙未直成、予生于時也、天氣清明、日月輝光、爰有黃氣、煙燼于堂、照耀室宅、其色煌煌、相而論之曰、未者爲土、魏之行也、厥日直成、應嘉名也、烟燼之氣、神之精也、無災無害、蒙神靈

也。○曜靈〔文帝紀·延康元年冬十月丙午·裴注引·

獻帝傳載禪代衆事曰〕：侍中劉虞等奏曰、(略)伏惟陛下體有虞之上聖、承土德之行運、當允陽明夷之會、應漢氏祚

終之數、合契皇極、同符兩儀、是以聖瑞表徵、天下同應、曆運去就、深切著明、論之天命、無所與議、比之時宜、無所與爭、故受命之期、時清日晏、曜靈施光、休氣雲蒸、〔曹丕·孟津詩〕：曜靈忽西邁、炎燭繼望舒。〔曹植·五遊詠〕

：曜靈未移景、倏忽造昊蒼。○和風〔藝文類聚〕作「和氣」。〔文帝紀·陳壽評·裴注引·典論帝自敘曰〕：建安十年、始定冀州、濊·貂貢良弓、燕·代獻名馬、時歲之暮春、勾芒司節、和風扇物、弓燥手柔、草淺獸肥、與族兄子丹獵

于鄴西、終日手獲麋鹿九、雉兔三十。〔曹植·承露盤銘〕：和氣四充、翔鳳所經。〔又·精微篇〕：黃初發和氣、明堂德教施。〔阮籍·大人先生傳〕：登其萬天而通觀、浴太始之和風。○明日映天〔漢魏六朝百三名家集〕作「明月

耿天」。〔詩藪〕所引作「明月映天」。○甘露被宇〔文帝紀·裴注引·獻帝傳載禪代衆事曰〕：辛亥、太史丞許芝條魏代漢見讖緯于魏王曰、(略)殿下即位、初踐祚、德配天

地、行合神明、恩澤盈溢、廣被四表、格于上下、是以黃龍數見、鳳皇仍翔、麒麟皆臻、白虎效仁、前後獻見于郊甸、甘露醴泉、奇獸神物、衆瑞並出、斯皆帝王受命易姓之符也。

〔曹植·文帝誄〕：雲英甘露、濊塗被宇。○高松〔鄭風·山有扶蘇〕：(毛序)山有扶蘇、刺忽也、所美非美然。(第二章)山有橋松、隰有游龍、不見子充、乃見狡童。(鄭箋)游龍猶放縱也、橋松在山上、喻忽無恩澤於大臣也、紅草放縱枝葉於隰中、喻忽聽恣小臣、此又言其養臣顛倒失其所也。(經典釋文)橋、本又作喬、毛作橋、王云、高也。〔詠懷詩其四十九〕：澤中生喬松、萬世未可期。○猗那

長楚〔檜風·隰有萋楚〕：隰有萋楚、猗離其枝。(毛傳)興也、萋楚、鉞也、猗離、柔順也。(鄭箋)鉞之性、

始生正直、及其長大則其枝猗離而柔順、不妄尋蔓草木、興者、喻人少而端慤則長大無情慾。○草蟲哀鳴〔召南·草蟲〕：嘒嘒草蟲、趯趯阜蟲、未見君子、憂心忡忡、亦既見止、亦既覯止、我心則降。(魯詩說)〔說苑·君道〕惡惡道

不能甚、則好善道亦不能甚、好善道不能甚、則百姓之親之也、亦不能甚、詩云、未見君子、憂心惓惓、亦既見止、亦既覯止、我心則說、詩人之好善道之甚也如此、哀公曰、善哉、吾聞君子成人之美、不成人之惡、微孔子、吾焉能聞斯言也哉。○鶴鳴振羽〔邠風·東山〕：(毛序)東山、周公東征也、周公東征、三年而歸、勞歸士、大夫美之、故作是詩也、(略)四章、樂男女之得及時也。(鄭箋)三監及淮

夷叛、周公乃東伐之、三年而後歸耳。(第四章)我徂東山、

惛惛不歸、我來自東、零雨其濛、倉庚于飛、熠燿其羽、之子于歸、皇駁其馬、親結其縞、九十其儀、其新孔嘉、其舊如之何。(鄭箋) 倉庚仲春而鳴、嫁取之候也、熠燿其羽、羽鮮明也、歸士始行之時、新合婚禮、今選、故極序其情以樂之。

其一の詩は、魏朝の盛時を回顧し、司馬氏の輔佐する今の魏朝に將來への希望のないことを言い、自らは濁世を避け、隱者の生き方に順うことを詠う作である。

冒頭から第六句までは、魏朝の盛時を言うものと思われる。しかし、これを司馬氏の支配する今の世を皮肉るものと解することも可能であろう。

第七・八句は、かつて在世したあるすぐれた人を暗示する表現、そして、第九・十句は、そのすぐれた人の死を哀しむ作者の氣持と、凱旋した兵士の喜びとを暗示する表現である。

第十一句以下の六句は、時勢に感慨をいだいた作者が、將來への展望を試みるのであるが、輝かしい魏朝は、古の名相伊尹のごとき司馬氏が輔佐の任にある、と皮肉りつつ、言外にその將來に希望のないことをにおわせ、さらに、わが身が才も器もともに時用に乏しいことを述べ、司

馬氏への加擔を避ける意を暗示するものである。

第十句に言う凱旋のことからは、甘露三年(二五八)二月に鎮壓された、淮南に據った諸葛誕の亂の際のものかと思われる。『晉書』によれば、司馬昭が京師に凱旋したのは、その年の四月のことであったといい、「鶴鴈振羽」の句に示される季節感と一致するように思う。

其二

月明星稀 天高氣寒 桂旗翠旌 珮玉鳴鸞 濯纓醴泉
被服蕙蘭 思從二女 適彼沅湘 靈幽聽微 誰觀玉顏
灼灼春華 綠葉含丹 日月逝矣 惜爾華繁

〔注〕○桂旗翠旌〔曹植・洛神賦〕：左倚采旄，右蔭桂旗。〔又・九詠〕：芙蓉車兮桂衡，結萍蓋兮翠旌。○鳴鸞

〔曹植・洛神賦〕：騰文魚以警乘，鳴玉鑾以偕逝。○

二女〔文帝紀・裴注引・獻帝傳載禪代衆事曰〕：乙卯，册詔魏王禪代天下曰、(略) 昔虞舜有大功二十、而放勳禪以天下、大禹有疏導之績、而重華禪以帝位、漢承堯運、有傳聖之義、加順靈祇、紹天明命、釐降二女、以嬪于魏。(略) 己巳、相國歆、太尉詡、御史大夫朗及九卿奏曰、(略)

堯知天命去己、故不得不禪舜、舜知曆數在躬、故不敢不受、不得不禪、奉天時也、不敢不受、畏天命也、漢朝雖承季末陵遲之餘、猶務奉天命以則堯之道、是以願禪帝位而歸

二女。(略)復令曰、昔者大舜飯糗茹草、將終身焉、斯則

孤之前志也、及至承堯禪、被袵裘、妻二女、若固有之、斯

則順天命也、羣公卿士誠以天命不可拒、民望不可違、孤亦

曷以辭焉。○靈幽〔曹操・祀故太尉橋玄文〕：故太尉橋

玄、誕敷明德、汎愛博容、國念明訓、士思令謨、靈幽體翳、

邈哉晞矣。○聽微 微、『詩紀』云、一作遠。○玉顏

〔曹植・洛神賦〕：轉盼流精、光潤玉顏。○灼灼春華

〔周南・桃夭〕：桃之夭夭、灼灼其華。(魯・韓詩說)〔廣

雅・釋訓〕：灼灼、明也。〔詠懷詩其八〕：灼灼西隄日、餘

光照我衣。〔又・其十二〕：昔日繁華子、安陵與龍陽、夭夭

桃李花、灼灼有輝光。〔王粲・神女賦〕 朱顏熙曜、曄若春

華、口譬含丹、目若瀾波。〔曹植・王仲宣誄〕：文若春華、

思若涌泉。〔又・閨情詩〕：妖姿豔麗、翳若春華。〔詠懷詩

其六十五〕：王子十五年、遊衍伊洛濱、朱顏茂春華、辯慧

懷清眞。○綠葉含丹〔曹植・宜男花頌〕：其曄伊何、綠

葉丹花。○華繁〔曹植・王仲宣誄〕：誰謂不傷、華繁中

零。〔詠懷詩其三〕：繁華有憔悴、堂上有荆杞。〔又・其三

十〕：從容在一時、繁華不再榮。

其二の詩は、春華のごとく將來大きく實るべき希望を含みながら、短命のままに終熄の日を迎えようとする魏朝の運命を惜しんだ作と思われる。

冒頭の「月明星稀」の句は、曹操の「短歌行」のそれを借用するもので、作者はこれにより魏朝の權威の没落と、時代がすでに司馬氏の威光の支配下にあることを暗示しようとしているのだと思われる。詩中にいう堯の二女で舜の二妃となった女性たちは、漢魏禪讓の際、魏の文帝に嫁した獻帝の二女を指すもので、作者が彼女らとともに沅湘のほとりにたずね求めようとした人は、若き魏の天子に比喩された魏朝そのものであるとすることができよう。「靈幽聽微、誰觀玉顏」の二句は、魏朝の運命が、すでに瀕死の人に類することを暗示した表現であろう。

其三

清風肅肅	脩夜漫漫	嘯歌傷懷	獨寐寤言	臨觴拊膺
對食忘餐	世無萱草	令我哀歎	鳴鳥求友	谷風刺憲
重華登庸	帝命凱元	鮑子傾蓋	仲父佐桓	河濱嗟虞
敢不希顏	志存明規	匪慕彈冠	我心伊何	其芳若蘭

〔注〕○清風肅肅・脩夜漫漫〔文帝紀・裴注引・獻帝傳

載禪代衆事曰〕：令曰、夫古聖王之治也、至德合乾坤、惠澤均造化、禮教優乎昆蟲、仁恩洽乎草木、日月所照、戴天履地含氣有生之類、靡不被服清風、沐浴玄德。〔曹丕・雜

詩・二首之其一〕：漫漫秋夜長、烈烈北風涼。○嘯歌傷懷〔小雅・白華〕：嘯歌傷懷、念彼碩人。○獨寐寤言〔衛風・考槃〕：考槃在澗、碩人之寯、獨寐寤言、永矢弗

諼。○臨觴〔曹植・求通親親表〕：高談無所與陳、發義無所與展、未嘗不聞樂而撫心、臨觴而歎息也。〔又・陳審舉表〕：臣每念之、未嘗不輟食而揮餐、臨觴而搯腕矣。

〔詠懷詩其三十四〕：臨觴多哀楚、思我故時人、對酒不能言、悽愴懷酸辛〔略〕愁苦在一時、高行傷微身、曲直何所爲、龍蛇爲我隣。○對食忘餐〔鄭風・狡童〕：〔毛序〕狡童、刺忽也、不能與賢人圖事、權臣擅命也。〔第一章〕彼狡童兮、不與我言兮、維予之故、使我不能餐兮。〔毛傳〕

昭公有壯狡之志。〔鄭箋〕不與我言者、賢者欲與忽圖國之政事、而忽不能受之、故云然、憂懼不遑餐也。〔胡承珙〕毛詩後箋卷七〕此傳云壯狡之志、則又非徒形貌、高注呂覽云壯狡多力之士、是壯狡與雄武意略同、昭公志自奮而所與圖者非其人、故惟有壯狡之志而闕于事機、終將及禍、愈使人思其故而憂之、至不能食息焉、然則謂毛以狡童目昭公爲

悖理者、皆不達古人之文義者也。○世無萱草・令我哀歎

〔衛風・伯兮〕：焉得諼草、言樹之背、願言思伯、使我心癢。〔詠懷詩其二〕：感激生憂思、萱草樹蘭房。○鳴鳥求友〔小雅・伐木〕：伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出自幽谷、遷

于喬木、嚶其鳴矣、求其友聲、相彼鳥矣、猶求友聲、矧伊人矣、不求友生、神之聽之、終和且平。〔魯詩說〕〔後漢書

・朱穆傳注引・蔡邕・正交論〕：古之交者、其義敦以正、其誓信以固、逮至周德始衰、頌聲既寢、伐木有鳥鳴之刺、谷風有棄予之怨、其所由來、政之缺也、自此已降、彌以陵

遲、或闕其始終、或彊其比周。○谷風刺愆〔小雅・谷風〕：習習谷風、維風及雨、將恐將懼、維予與女、將安將樂、女轉棄予。〔魯詩說〕〔王符・潛夫論・交際篇〕：夫以逾疎之賤、伏於下流、而望日忘之貴、此谷風所爲內摧傷、而介推所以赴深山也。

其三の詩は、秋夜、作者をとらえた執拗なまでの孤絶感と、その孤絶感の根源にわだかまる人間そのものへの不信が語られ、そして、司馬氏の支配する世を避け、隱者として生きんとする作者の志向が表明されている作である。

第九・十句は、『詩經』の「伐木」・「谷風」の二篇を典據とする。そして、それらの篇の「魯詩」の説によれば、

人間世界の道德的頹廢と信賴の崩壞とが、すでに古代に始まることを、この二句は言うものと解される。

其四

陽精炎赫 卉木蕭森 谷風扇暑 密雲重陰 激電震光
迅雷遺音 零雨降集 飄溢北林 汎汎輕舟 載浮載沈
感往悼來 懷古傷今 生年有命 時過慮深 何用寫思
嘯歌長吟 誰能秉志 如玉如金 處哀不傷 在樂不淫
恭承明訓 以慰我心

〔注〕 ○陽精〔曹植・文帝誄・序〕：惟黃初七年五月七日、大行皇帝崩、嗚呼哀哉、於時地震地駭、崩山隕霜、陽精薄景、五緯錯行。〔阮籍・大人先生傳・采薪者歌〕：日沒不周西、月出丹淵中、陽精蔽^{世職新}語作晦不見、陰光代^{本集作大}爲雄。○谷風扇暑〔文選・王褒・聖主得賢臣頌〕：虎嘯而谷風冽、龍興而致雲氣。(善注)管輅別傳曰、龍者陽精、以潛于陰、幽靈上通、和氣感神、二物相扶、故能興雲、虎者陰精、而居于陽、依木長嘯、動於巽林、二數相感、故能運風。〔春秋元命苞〕：猛虎嘯而谷風起、類相動也。〔曹植・文帝誄〕：敷莢階除、系風扇暑。○密雲重陰〔張衡・

南都賦〕：玄雲合而重陰、谷風起而增哀。〔詠懷詩其九〕：寒風振山岡、玄雲起重陰。○「激電震光」以下三句〔樂稽耀嘉〕：禹將受位、天意大變、迅風靡木、雷雨晝冥、以明將去虞而適夏也。〔三少帝紀・高貴鄉公髦・甘露五年五月・裴注引・魏氏春秋〕：戊子夜、帝自將允從僕射李昭、黃門從官焦伯等下陵雲臺、鎧仗授兵、欲因際會、自出討文王、會雨、有司奏卻日、遂見王經等出黃素詔于懷曰、是可忍也、孰不可忍也、今日便當決行此事、入白太后、遂拔劍升輦、帥殿中宿衛蒼頭官僮擊戰鼓、出雲龍門、賈充自外而入、帝師潰散、猶稱天子、手劍奮擊、衆莫敢逼、充師厲將士、騎督成倅、弟成濟以矛進、帝崩于師、時暴雨雷霆、晦冥。○北林〔秦風・晨風〕：歎彼晨風、鬱彼北林。(毛傳)興也、歎、疾飛貌、晨風、鷗也、鬱、積也、北林、林名也、先賢招賢人、賢人歸往之、駛疾如晨風之飛入北林。(魯詩說)〔文選・曹植・雜詩六首之其一、高臺多悲風、朝日照北林、李善注引・新語曰〕：高臺喻京師、悲風言教令、朝日喻君之明、照北林言狹、比喻小人。〔詠懷詩其一〕：孤鴻號外野、翔鳥鳴北林。○汎汎輕舟・載浮載沈〔小雅・菁菁者莪〕：(毛序)菁菁者莪、樂育材也、君子能長育人材、則天下喜樂之矣。(第四章)汎汎楊舟、載沈載浮。(毛傳)楊木爲舟、載沈亦浮、載浮亦浮。(鄭箋)舟者沈

物亦載、浮物亦載、喻人君用士、文亦用、武亦用、於人之材無所廢。(魯詩說)〔淮南子・說林訓、舟能沈能浮、愚者不敢加足、畏其沈、

加足、高誘注〕：舟能載浮物、愚者不敢加足、畏其沈、詩云、汎汎楊舟、載沈載浮、是也。(嵇康・四言詩)：汎汎柏舟、載浮載滯。

〔詠懷詩其三十二〕：漁父知世患、乘流泛輕舟。〔又、其四十一〕：隨波紛綸客、汎汎若浮鷁。

〔又、其六十三〕：翺翺觀彼陂、撫劍登輕舟。〔又、其七十二〕：修塗馳軒車、長川載輕舟。〔又、其七十六〕汎汎乘輕舟、演漾靡所望。

○時過慮深〔文選・曹丕・典論論文〕：夫然則古人賤尺璧而重寸陰、懼乎時之過已。(善注)孔叢子、孔子曰、不讀易則不知聖人之心、必不使時過已也。〔文選・吳質・答魏太子牋〕：今實已四十二矣、白髮生鬢、所慮日深、實不復若平日之時也。

其四の詩は、作者が魏晉禪代の進行する世相に感じ、心の平靜を保ちたいと願ううたである。

冒頭八句の敘景は、魏朝の盛時が去り、司馬氏が事實上天下を掌握したことを暗示するもので、第五句以下の四句は、高貴郷公の袱慮を指している可能性がある。

第九句以下の八句は、老とともに深まる憂慮に苦しむ自らの懐いを述べている。第九・十句は、作者自身の時勢に

順い生きることと言うものか。

其五

立象昭回 陰陽攸經 秋風夙厲 白露宵零 脩林彫殞

茂草收榮 良時忽邁 朝日西傾 有始有終 誰能久盈

太微開塗 三辰垂精 峨峨羣龍 躍奮紫庭 鱗分委瘳

時高路清 爰潛爰默 韜影隱形 願保今日 永符脩齡

〔注〕○象〔周易・繫辭・上〕：在天成象、在地成形、變化見矣。(韓康伯注)象況日月星辰、形況山川草木也、懸象運轉、以成昏明、山澤通氣、而雲行雨施、故變化見矣。

○昭回〔詠懷詩其四十〕：晷度有昭回、哀哉人命微。○陰陽〔詠懷詩其二十八〕：陰陽有變化、誰云沉不浮。〔又、其四十二〕陰陽有舛錯、日月不常融。〔大人先生傳〕：陰陽更而代邁、四時奔而相迫。○秋風〔詠懷詩其三〕：秋風吹飛藿、零落從此始。○白露〔秦風・蒹葭〕：蒹葭蒼蒼、白露爲霜。(齊詩說)〔太平御覽十二事類賦天部引〕詩含神霧曰陽氣終、白露凝爲霜。(宋均曰)白露、行露也、陽終、陰用事、故曰、白露凝爲霜也。○茂草〔小雅、小弁〕：跋踰周道、鞠爲茂草。(蔡邕、述行賦)：周道鞠爲

茂草兮、哀正路之日荒。○有始有終〔論語・子張第十九〕：子夏聞之曰、(略)有始有卒者、其惟聖人乎。〔三少帝紀・高貴鄉公髦・正元三年夏四月丙辰〕：帝曰、夫有始有卒、其唯聖人。〔詠懷詩其四十二〕：人誰不善始、黜能尅厥終。○太微開塗・三辰垂精〔文帝紀・裴注引・獻帝傳載禪代衆事曰〕：太史丞許芝條魏代漢見讖緯于魏王曰、(略)建安十年、彗星先除紫微、二十三年、復掃太微、於是尙書令桓階等奏曰、(略)漢氏衰廢、行次已絕、三辰垂其微、史官著其驗。〔曹丕・月重輪行〕：三辰垂光、照臨四海。○峨峨羣龍〔大雅、棫樸〕濟濟辟王、左右奉璋、奉璋峩峩、髦士攸宜。(毛傳)峩峩、盛壯也、髦、俊也。(鄭箋)士、鄉士也、奉璋之儀、峩峩然、故今俊士所宜。〔爾雅、釋訓〕：峨峨、祭也。〔蔡邕、答對元式詩〕濟濟羣彥、如雲如龍。○紫庭〔文帝紀・裴注引・獻帝傳載禪代衆事曰〕：己巳、魏王上書曰、(略)臣以蒙蔽、德非一聖、猥當天統、不敢聞命、敢屢抗疏、略陳私願、庶章通紫庭、得全微節、情達宸極、永守本志。○時高路清〔詠懷詩其三十五〕：時路烏足爭、太極可翱翔。○隱形〔吳志・吾粲傳〕：粲教曰、夫應龍以屈伸爲神、鳳皇以嘉鳴爲貴、何必隱形於天外、潛鱗於重淵者哉。○今日〔文帝紀・裴注引・獻帝傳載禪代衆事曰〕：王令曰、(略)庶欲保全髮

齒、長守今日、以沒於地、以全魏國、下見先王、以塞負荷之責。○脩齡〔詠懷詩其四十〕：修齡適余願、光寵非己威。〔又、其四十一〕列仙停修齡、養志在沖虛。

其五の詩は、榮枯盛衰の原理が、自然界と同様人間世界を支配するものであるから、今、邪惡な力を奮う者たちも、やがては滅びる運命にあり、自分は濁世を避け、隱遁・韜晦し、日々の生命を保守して長生を遂げたいと願う作である。

冒頭八句は、一年に秋冬の季節があるように、美しく盛んであつたものが滅びの時を迎えることは必然の理であることを説いているが、これによつて作者は、魏朝のまさに滅びんとすることを暗示しようとしたのであろう。

第九句は、高貴郷公のことばのもじりで、第十句とともに前・後段の橋渡しの働きを果たしている。

第十一句以下の六句は、漢魏禪代の際のことばを傳える史書の記載に見えるような、讖緯のことばを織りこみながら、高貴郷公弑虐の後、晉朝創建に奔命する人々の姿を暗示するが、しかし、彼らもやがては滅び、世は高く清らかな時を迎えるであろうと言うものである。

其六

璣衡運速 四節伏宣 冬日悽悽 玄雲蔽天 素冰彌澤
白雲依山 □□逝往 譬彼流川 人誰不設 貴使名全
大道夷敞 蹊逕爭先 玄黃塵垢 紅紫光鮮 嗟我孔父
聖懿通玄 非義之榮 忽若塵煙 雖無靈德 願潛于淵

〔注〕 ○璣衡運速〔詠懷詩其四十〕：混元生兩儀、四象運衡璣。○冬日〔小雅・四月〕：冬日烈烈、飄風發發、

民莫不穀、我獨何害。(鄭箋)烈烈、猶栗烈也、發發、疾

貌、言王爲酷虐慘毒之政、如冬日之烈烈矣、其亟急行於天

下、如飄風之疾也。○玄雲〔詠懷詩其九〕：寒風振山

岡、玄雲起重陰。〔阮籍・東平賦〕：玄雲興四周兮、寒雨

淪而下降。〔大人先生傳〕：崔巍高山勃玄雲、朔風橫厲白

雪紛、積水一作若陵寒傷人。○譬彼流川〔詠懷詩其三十

二〕：孔聖臨長川、惜逝忽若浮。○人誰不設 設、節案疑

〔沒〕之誤〔曹植・任城王誄序〕：人誰不沒、貴有遺聲。

〔又・王粲誄〕：人誰不歿、達士殉名。○貴使名全〔詠

懷詩其三十九〕：忠爲百世榮、義使令名彰。○玄黃塵垢

〔嵇康・五言詩三首之其二〕：脩夜寂無爲、獨步光庭側、

仰首看天衢、流光曜八極、撫心悼季世、遙念大道逼、飄飄當路士、悠悠進自棘、得失自己來、榮辱相蠶食、朱紫雖周樹人云、玄黃、太素貴無色、淵淡體至道、色化同消息。〔又、疑當作雜〕玄黃、太素貴無色、淵淡體至道、色化同消息。〔又、其三〕：俗人不可親、松喬是可鄰、何爲穢濁間、動搖增垢塵。〔詠懷詩其七十四〕：猗歟上世士、恬淡志安貧、季葉道陵遲、馳騫紛垢塵。○聖懿 一作「聖意」○通玄〔詠懷詩其七十七〕：招彼玄通士、去來歸羨遊。○願潛于淵〔小雅・四月〕：匪鱣匪鮪、潛逃于淵。(鄭箋)今非鵬鳶而高飛、非鯉鮪而處淵、皆驚駭辟害爾、喻民性安土重遷、今而逃走、亦畏亂政故。〔詠懷詩其七十七〕綸深魚淵潛、增設鳥高翔。

其六の詩は、人間の不義邪惡が瀰漫する世を慨嘆し、孔子の教えに順い、隱棲することを詠う作である。

冒頭六句は、自然界に嚴冬の訪れがあるように、人間の世界にも、酷虐慘毒の政が行われる冬の時代の到來することを言うもので、暗に司馬氏の暗黒政治を刺譏する意をひそませてゐる。

第十一句以下の四句は、司馬氏とそれに與する邪惡の徒を譏諷するものである。

其七

朝雲四集 日夕布散 素景垂光 明星有爛 肅肅翔鸞
雍雍鳴雁 今我不樂 歲月其晏 嗟叟毗周 子房翼漢
應期左命 庸勳靜亂 身用功顯 德以名讚 世無曩事
器非時幹 委命有□ 承天無怨 嗟爾君子 胡爲永歎

〔注〕 ○朝雲四集·日夕布散〔曹風·候人〕：〔毛序〕
候人，刺近小人也，共公遠君子而好近小人焉。（第四章）

薈兮蔚兮，南山朝隴。（毛傳）薈蔚，雲興貌，南山、曹南山也，隴，升也。（鄭箋）薈蔚之小雲，朝升於南山，不能爲大雨，以喻小人雖見任於君，終不能成其德教。〔漢書·五行志·下之上〕：皇之不極，是謂不建，皇，君也，極，中、建、立也，人君貌言視聽思心五事皆失，不得其中，則不能立萬事，失在眊悖，故其咎眊也，王者自下承天理物，雲起於山，而彌於天，天氣亂，故其罰常陰也，一曰，上失中，則下疆盛而蔽君明也，（略）皇極之常陰，劉向以爲春秋亡其應，一曰，久陰不雨是也。○素景垂光〔文選·謝朓·和王著作八公山詩〕：戎州昔亂華，素景淪伊穀。（善注）素景，謂晉也，干寶搜神記曰，金者，晉之行也。

〔詠懷詩其四十〕 噉日布炎精，素景垂輝。 ○明星有爛

〔鄭風·女曰鷄鳴〕：子與視夜，明星有爛。（毛傳）言小星已不見也。○肅肅翔鸞·雍雍鳴雁〔阮籍·東平賦〕：

鳳鳥自歌、翔鸞自舞。〔邶風·匏有苦葉〕：（第三章）雝

雝鳴雁，旭日始旦。（第一章）匏有苦葉，濟有深涉，淅則

厲，淺則揭。（第四章）招招舟子，人涉卬否，人涉卬否，

印須我友。（魯詩說）〔張衡·應問〕：深厲淺揭，隨時爲義，

（略）捷徑邪至，我不忍以投步，干進苟容，我不忍以歎肩，

雖有犀舟勁楫，猶人涉卬否，有須者也。〔嵇康·幽憤詩〕

：嗚嗚鳴鴈，奮翼北遊，順時而動，得意忘憂。 ○今我不

樂·歲月其晏〔小雅·小明〕：〔毛序〕小明，大夫悔仕於

亂世也。（鄭箋）名篇曰小明者，言幽王日小其明，損其政

事，以至於亂。（第二章）昔我往矣，日月方除，曷云其還，

歲聿云莫。〔曹丕·善哉行〕今我不樂，歲月如馳。 ○應期

〔三少帝紀·高貴鄉公髦·甘露元年·裴注引·魏氏春秋〕

：二月丙辰，帝宴羣臣於太極東堂，（略）顛等對曰，夫天

下重器，王者天授，聖德應期，然後能受命創業。〔阮籍·

與晉王薦盧播書〕：應期作輔，論道敷化。 ○靜亂〔曹丕

·黎陽作〕：我獨何人，能不靖類聚亂。 ○委命有□·承

天無怨 一作「委命承天，無尤無怨」 ○嗟爾君子〔小雅

·小明〕：〔第四章〕嗟爾君子，無恆安處。（第五章）嗟

爾・君子、無恆安息。

其七の詩の前半八句の意は、人材登用を誤つた魏朝が今や没落しようとし（冒頭の二句）、これに代わって司馬氏が晋朝を創建しようとしていること（第三・四句）を述べ、こうした時世の變遷に順應して生きようとする作者自身の姿を、第五・六句の「翔鸞」「鳴雁」のイメージに託して表わし、さらに、亂世に生きなければならぬ者の憂悔の情を、第七・八句に表わしたものとされる。

續く八句で、作者は、古の呂尙・張良のような佐命の功を以て讃えられる人物が今の世にいないことを指摘し、言外に司馬氏の魏朝篡奪を刺譏する。そして、末尾四句で、すべては天意に委ね嘆くことはないと述べているが、これは、司馬氏に滅びの時のくることを、作者が予見していたことを表わすものである。

其 八

日月隆光	克鑒天聰	三后臨朝	二八登庸	升我俊髦
黜彼頑凶	太上立德	其次立功	仁風廣被	玄化潛通
幸遭盛明	親此時雍	棲運衡門	唯志所從	出處殊塗

俯仰異容 瞻歎古烈 思邁高蹤 嘉此箕山 忽彼虞龍

〔注〕○天聰〔曹植・求通親親表〕：實懷鶴立企佇之心、敢復陳聞者、冀陛下儼發天聰而垂神聽也。○臨朝

一作「臨軒」。○二八登庸〔文選・張衡・思玄賦〕：幸

二八之選處兮、嘉傳說之生殷。〔舊注〕二八、八愷・八元

也。〔善曰〕左氏傳、季孫行父曰、昔高辛氏有才子八人、

伯奮・仲堪・叔獻・季仲・伯虎・仲熊・叔豹・季狸、言此

八人、忠肅恭懿、宣慈惠和、天下之民、謂之八元、元、善

也、長也、八愷者、高陽氏有才子八人、倉舒・隕愷・禱戴

・大臨・扈降・庭堅・仲容・叔達、言此八人、齊聖廣淵、

明允篤誠、天下之民、謂之八愷。〔與晉王薦盧播書〕：虞

舜登庸、元凱成事。○頑凶〔曹植・責躬〕：咨我小子、

頑凶是嬰、逝慚陵墓、存愧闕庭。○太上立德・其次立功

〔三少帝紀・高貴鄉公髦・甘露元年・裴注引・魏氏春秋〕

：二月丙辰、帝宴羣臣於太極東堂、與侍中荀顛・尙書崔贊

・袁亮・鍾毓・給事中書令虞松等並講述禮典、遂言帝王

優劣之差、帝慕夏少康、〔略〕帝曰、諸卿論少康因資、高

祖創造、誠有之矣、然未知三代之世、任德濟勳如彼之難、

秦・項之際、任力成功如此之易、且太上立德、其次立功、

漢祖功高、未若少康盛德之茂也。○仁風〔文帝紀・裴注

引・獻帝傳載禪代衆事曰：乙卯、册詔魏王禪代天下曰、

(略)今王纘承前緒、至德光、御衡不迷、布德優遠、聲教被四海、仁風扇鬼區、是以四方效珍、人神響應、天之曆數實在爾躬。〔曹植・文帝詠〕仁風、儻物、德以禮宣。○玄

化〔曹植・責躬〕：於穆顯考、時惟武皇、受命於天、寧濟四方、朱旗所拂、九土披攘、玄化滂流、荒服來王。○

時雍〔曹植・求通親親表〕：臣之愚蔽、固非虞伊、至於欲陛下崇光被時雍之美、宣緝熙章明之德者、是臣悽悽之誠、竊所獨守。〔又・王仲宣詠〕：世祖撥亂、爰建時雍。

○出處殊塗、俯仰異容〔嵇康・與呂長悌絕交書〕：雖出處殊塗、而歡愛不衰也。〔魏志・管寧傳〕：正始二年、大僕陶丘一(略)薦寧曰、雖出處殊塗、俯仰異體、至於興治美俗、其撥一也。○虞龍〔漢書・百官公卿表〕：龍作納言、出入

帝命。(應劭曰)納言、如今尚書、管王之喉舌也。〔三少帝紀・高貴鄉公髦・甘露五年五月己丑・裴注引・漢晉春秋〕

：帝威權日去、不勝其忿、乃召侍中王沈・尚書王經・散騎常侍王業、謂曰、司馬昭之心、路人所知也、吾不能坐受廢辱、今日當與卿等自出討之、王經曰、昔魯昭公不忍季氏、

敗走失國、爲天下笑、今權在其門、爲日久矣、朝廷四方皆爲之致死、不顧逆順之理、非一日也、且宿衛空闕、兵甲寡弱、陛下何所資用、而一旦如此、無乃欲除疾而更深之邪、

禍殆不測、宜見重詳。

其八の詩の冒頭からの十二句は、その第七・八句が高貴郷公のことは借用することから見て、高貴郷公を弑虐して後の、司馬氏による擅權體制の欺瞞性を皮肉るものと推測される。そして、作者は、後半八句にこうした世に生きるには隱棲のみちしか残されていないことをいい、高貴郷公の叛亂に殉死した尚書の王經のように忠直であることは、自らの命を損う愚直の生き方である、と述べているのである。

其九

登高望遠	周覽八隅	山川悠逸	長路乖殊	感彼墨子
懷此楊朱	抱影鶴立	企首踟躕	仰瞻翔鳥	俯視游魚
丹林雲霧	綠葉風舒	造化網緼	萬物紛敷	大則不足
約則有餘	何用養志	守以冲虛	猶願異世	萬載同符

〔注〕○登高望遠〔詠懷詩其十七〕：登高望九州、悠悠分曠野。〔曹丕・十五〕：登山而遠望、谿谷多所有。〔詠懷詩其十一〕：遠望令人悲、春氣感我心。○周覽八隅〔曹

植・七啓〕：華閣綠雲、飛陛凌虛、俯眺藝文流星、仰觀八隅、升龍攀而不逮、眇天際而高居。〔大人先生傳〕：飄飄於四運、飄飄乎八隅。○山川悠遠・長路乖殊〔小雅・漸漸之石〕：山川悠遠、維其勞矣。〔曹丕・燕歌行〕：別日何易會日難、山川悠遠路漫漫。〔曹植・送應氏二首之其一〕：山川阻藝文且遠、別促會日長。○感彼墨子・懷此楊朱〔詠懷詩其二十〕：楊朱泣岐路、墨子悲染絲。〔又・其七十四〕：甯子豈不類、楊歌誰肯殉。○抱影〔楚辭・哀時命〕：廓抱景而獨倚兮、超永思乎故鄉。〔注〕言己在於山澤、廓然無耦、獨抱形景而立。○踟躕〔曹丕・秋胡行〕：企予望之、步立踟躕。○翔鳥・游魚〔曹植・情詩〕：游魚潛綠水、翔鳥薄天飛。〔詠懷詩其一〕：孤鴻號外野、翔鳥鳴北林。○綠葉〔詠懷詩其七〕：芳樹垂綠葉、青雲自逶迤。○養志・沖虛〔詠懷詩其四十一〕：列仙停修齡、養志在沖虛。○異世〔文帝紀・裴注引・獻帝傳載禪代衆事曰〕：侍中劉輿等奏曰、伏惟陛下以大聖之純懿、當天命之曆數、觀天象則符瑞著明、考圖緯則文義煥炳、察人事則四海齊心、稽前代則異世同歸。○萬載〔詠懷詩其四十二〕：休哉上世士、萬載垂清風。

其九の詩は、十三首中でただ一首の、直接時世のことが

らについて觸れるところのないうたである。ここで詠われているのは、人生に乖離の悲哀は避けられないものであるが、その悲哀にとどまることなく、天道が常に公平無私の態度であることに慰めを見出し、さらに、天道にならない、沖虚の態度を守ることこそ、後世、そして永遠に、道と一體となりうる生き方であるという主張、ないしは哲學である。

冒頭の八句は、巨視的に人生をとらえようとする者が、乖離の悲哀と孤獨をいだかざるをえないことを述べるものである。

第九句以下の八句は、森羅萬象を生成しつづける造化の働きが、實は、天道の公平無私の態度の現われであることを行い、前段よりさらに巨視的、根源的觀點に作者が立つたことを示すものである。

其 十

微微我徒 秩秩大猷 研精典素 思心淹留 迺命僕夫
 興言出游 浩浩洪川 汎汎楊舟 仰瞻景曜 俯視波流
 日月東遷 景曜西幽 寒往暑來 四節代周 繁華茂春
 密葉殞秋 盛年衰邁 忽焉若浮 逍遙逸豫 與世無尤

〔注〕 ○微微我徒・秩秩大猷〔漢書・韋賢傳引・韋孟・在鄒詩〕：微微小子、既耆且陋、豈不牽位、穢我王朝、（略）既去禰祖、惟懷惟顧、祁祁我徒、載負盈路。（顏師古曰）徒、謂學徒也。〔曹植・武帝誄〕：微微漢嗣、我王匡之。〔小雅・黍苗〕：我徒我御、我師我旅。（毛傳）徒、行者。（鄭箋）步行曰徒。〔小雅・巧言〕：（毛序）巧言、刺幽王也、大夫傷於讒、故作是詩也。（第四章）奕奕寢廟、君子作之、秩秩大猷、聖人莫之、他人有心、予忖度之、躍躑躅免、遇犬獲之。（毛傳）秩秩、進智也。（鄭箋）猷、道也、大道、治國之禮法。○研精典素〔明帝紀・景初三年・裴注引・魏書〕：帝容止可觀、望之儼然、自在東宮、不交朝臣、不問政事、唯潛思書籍而已。〔曹丕・答中山王獻黃龍頌詔^{黃初三年}〕：王研精墳典、耽味道眞。〔與晉王廙盧播書〕：研精墳典、升堂觀輿。○思心〔漢書・五行志・下之上〕：傳曰、思心之不容、是謂不聖、厥咎霧、厥罰恆風、厥極凶短折、（略）時則有金木水火沴土、思心者、心思慮也、容、寬也、孔子曰、居上不寬、吾何以觀之哉、言上不寬大包容臣下、則不能居聖位、貌言視聽、以心爲主、四者皆失、則區霧無識、故其咎霧也、（略）凡思心傷者病土氣、土氣病則金木水火沴之。○淹留〔東平賦〕：豈淹留以爲感兮、將易乎殊方。○僕夫〔小雅・出車〕：召彼僕夫、

謂之載矣。○興言出游〔小雅・小明〕：念彼共人、興言出宿、豈不懷歸、畏此反覆。〔邶風・泉水〕：駕言出游、以寫我憂。〔衛風・竹竿〕：淇水滌滌、檜楫松舟、駕言出游、以寫我憂。○洪川〔詠懷詩其三十八〕：炎光延萬里、洪川蕩湍瀨。○汎汎楊舟〔小雅・菁菁者莪〕：汎汎楊舟、載沈載浮、既見君子、我心則休。〔小雅・采芣〕：汎汎楊舟、紉纜維之。○寒往暑來・四節代周〔大人先生傳〕：寒暑代征邁、變化更相推。〔詠懷詩其七〕：四時更代謝、日月遞差池。○繁華 見四言詠懷詩其二注 ○忽焉若浮〔詠懷詩其三十二〕：孔聖臨長川、惜逝忽若浮。

其十の詩は、作者が、魏朝の衰微は思慮に缺ける天子に原因することに思いを致し、新たな展望を求め出遊したが、結局は、萬物が時間の迅速な流れの中に榮枯盛衰をくりかえす存在であり、自らに與えられた時を樂しみつつ、世と争うことなく生きるのが正しいみちである、と悟ったことを詠うものである。

第三・四句は、經典研究に精通していなから天子としての思心（思慮）をそなえていなかった誰かを指していると思われる。私は、それに高貴郷公髦を當てたいと考えるが、あるいは、明帝などを含めて歴代の魏帝をひろく指し

ているとも考えられる。

其 十一

我徂北林	遊彼河濱	仰攀瑤幹	俯視素綸	隱鳳棲翼
潛龍躍鱗	幽光韜影	體化應神	君子邁德	處約思純
貨殖招讖	篔簹稱仁	夷叔採薇	清高遠震	齊景千駟
爲此埃塵	嗟爾後進	茂茲人倫	蕁門主寶	謂之道眞

〔注〕 ○隱鳳・潛龍〔曹植・文帝誄〕：仁義陸沈、大行揚之、潛龍隱鳳、大行翔之。 ○採薇〔詠懷詩其九〕：下有采薇士、上有嘉樹林。 ○人倫・道眞〔曹植・文帝誄〕：皓皓太素、兩儀始分、中和產物、肇有人倫、爰暨三皇、寔秉道眞。〔詠懷詩其四十二〕：保身念道眞、寵耀焉足崇。〔又・其七十四〕：咄嗟榮辱事、去來味道眞、道眞信可娛、清潔存精神。

前半八句は、司馬氏の支配する世において、魏朝に心を寄せる人士がその才智を韜晦し、變幻自在に生きなければならぬことを言うものである。そして、そうした擬裝をまとわなければならないとしても、君子は徳に勉め、寡欲

を守り、純粹を慕うのが本来のあり方であることを、夷叔・顔回と子貢・齊の景公という人々に對する後世の評價のちがいを例として、次の八句に論じている。末尾四句は、作者の後進の徒に對する訓戒を述べるものである。

其 十二

華容豔色	曠世特彰	妖冶殊麗	婉若清揚	鬢髮娥眉
綿邈流光	藻采綺靡	從風遺芳	廻首悟精	魂射飛揚
君子克己	心絮冰霜	泯泯亂昏	在昔二王	瑤臺璇室
長夜金梁	殷氏放夏	周翦紂商	於戲後昆	可爲悲傷

〔注〕 ○華容豔色〔文選・宋玉・招魂〕：蘭膏明燭、華容備些。〔注〕王逸曰、容、貌也、張銑曰、華容、謂美人也。〔曹植・洛神賦〕：華容婀娜、令我忘餐。〔詠懷詩其十二〕：梁東有芳草、一朝再三榮、色容豔姿美、光華耀傾城。 ○曠世〔曹植・卞太后誄〕：去奢卽儉、曠世作顯。

〔詠懷詩其二十一〕：雲間有玄鶴、抗志揚哀聲、一飛冲青天、曠世不再鳴。〔阮籍・元父賦〕：其區域一作雍絕斷塞、分迫旋淵、終始同貫、本末相牽、疇昔訖今、曠世歷年。 ○婉若清揚〔鄭風・野有蔓草〕：野有蔓草、零露瀼瀼、

有美一人、婉如清揚、邂逅相與、與子偕滅。〔曹丕・善哉行二首之其二〕：有美一人、婉如清類聚揚。〔曹植・洛神賦〕：於是越北沚、過南岡、紆素領、回清揚。○鬢髮

〔鄭風・君子偕老〕：鬢髮如雲、不屑髻也。○娥眉〔衛

風・碩人〕：螭首蛾眉、巧笑倩兮、美目盼兮。〔楚辭・離

騷〕：衆女嫉余之蛾眉兮、謠諑謂余以善淫。〔王逸注〕蛾

眉、好貌、蛾、一作娥。○流光〔曹植・靜思賦〕：夫何

美女之嫋妖、紅顏擘而流光。〔又・七啓〕：紅顏宜笑、睇

盼流光。○綺靡〔阮籍・清思賦〕：紛綺靡而未盡兮、先

列宿之規矩。〔詠懷詩其六十八〕：綺靡存亡門、一遊不再

尋。○從風遺風〔詠懷詩其十九〕：修容耀姿美、順風振

微芳。○魂射飛揚〔詠懷詩其三十九〕：臨難不顧生、身

死魂飛揚。○君子〔詠懷詩其十六〕：小人計其功、君子

道其常。○瑤臺〔清思賦〕：林石之隕從、而瑤臺不照其

光。○周翦紉商〔曹丕・至廣陵於馬上作詩〕：古公宅岐

邑、實始剪股商。

前半十二句において、作者は、神女との戀愛に假託して女性的美に耽溺することの危険を諷諭し、君子が克己して欲望から心の純粹さを守ることのできる者であることを強調している。そして、後半八句において、夏桀・殷紂の滅

亡の因が女色への耽溺にあつたことを指摘し、後世への戒めとするとともに、悲傷の情を述べるのである。

この詩は、おそらく女色に耽溺したと言われる明帝と齊王芳とを刺譏する作品であろう。

其 十三

晨風掃塵	朝雨灑路	飛颺龍騰	哀鳴外顧	攬轡按策
進退有度	樂往哀來	悵然心悟	念彼恭人	眷眷懷顧
日月運往	歲聿云暮	嗟余幼人	既頑且固	豈不志遠
才難企慕	命非金石	身輕朝露	焉知松喬	頤神太素
逍遙區外	登我年祚			

〔注〕○晨風〔曹植・蟬賦〕：秋霜紛以宵下、晨風烈其過庭。○朝雨灑路〔詠懷詩其三十七〕：嘉時在今辰、零雨洒塵埃。○哀鳴〔曹植・贈王粲詩〕：中有孤鴛鴦、哀鳴求匹儔。〔詠懷詩其二十四〕：願爲雲間鳥、千里一哀鳴。〔阮籍・鳩賦〕：揚哀鳴以相送、悲一往而不集。○攬轡按策〔曹植・洛神賦〕：攬騏驎以抗策、悵盤桓而不能去。○進退有度 一作「進止應度」。〔大人先生傳〕：進退周旋、咸有規矩。○樂往哀來・悵然心悟〔曹丕・燕歌行二

首之其二) : 樂往哀來摧肺肝。〔又・與朝歌令吳質書〕 :

每念昔日南皮之遊、誠不可忘、既妙思六經、逍遙百氏、彈碁閒設、終以六博、高談娛心、哀箏順耳、馳騁北場、旅食南館、浮甘瓜於清泉、沈朱李於寒水、白日既匿、繼以朗月、

同乘竝載、以遊後園、輿輪徐動、參從無聲、清風夜起、悲笳微吟、樂往哀來、愴然傷懷。○念彼恭人・眷眷懷顧・

日月運往・歲聿云暮〔小雅・小明〕 : 昔我往矣、日月方除、曷云其遷、歲聿云莫、念我獨兮、我事孔庶、心之憂矣、憚我不暇、念彼共人、晷晷懷顧、豈不懷歸、畏此譴怒。

○既頑且固〔三少帝紀・高貴鄉公髦・甘露元年・裴注引

・帝集載帝自敍始生禎祥曰〕 : 惟予小子、支胤末流、謬爲靈祇之所相祐也、豈敢自比于前喆、聊記錄以示後世焉、其辭曰、(略) 以眇眇之身、質性頑固、未能涉道、而遵大路、

臨深履冰、涕泗憂懼。○志遠〔向秀・思舊賦序〕 : 然嵇志遠而疎、呂心曠而放、其後各以事見法。○朝露〔詠懷

詩其三十五〕 : 壯年以時逝、朝露待太陽。○焉知〔太平御覽〕作「焉得」。○頤神〔嵇康・四言贈兄秀才入軍詩

十八章之其十六〕 : 長寄靈岳、怡志養神。○太素〔阮籍

・老子贊〕 : 陰陽不測、變化無倫、飄飄太素、歸虛反眞。

〔嵇康・四言詩〕 : 流詠太素、俯讚玄虛。〔又・五言詩三首之其二〕 : 朱紫雖周樹人云疑當作雜玄黃、太素貴無色。○區外

〔嵇康・四言詩〕 : 將遊區外、嘯侶長鳴。〔又・答二郭詩三首之其二〕 : 豈若翔區外、餐瓊漱朝霞。〔又・五言詩三首之其二〕 : 輕舉翔區外、濯翼扶桑津。

前半十二句は、そこに、文帝のことばをもじつたものと見なされる表現(第七・八句)が置かれていることから推測すると、曹丕と諸文人とが君臣の隔てなく遊宴したという、魏朝の盛時と曹丕その人との回顧思慕するものと思われる。第九句の「恭人」とは曹丕を暗示することばか。

後半十句は、高貴郷公が志遠く、才すぐれるにもかかわらず、質性頑固のゆえに非命に倒れたことを言い、人命のはかないことに鑑みれば、身を世俗の外に置き、壽命を完うすることがわが願いである、と述べたものである。第十三句の「幼人」は高貴郷公を暗示したことばであるう。